文化の生成過程：その1

——情報代謝モデルを考える[1)]——

遠　山　　淳

世は去り，世は来たる，
しかも地は永遠に続く。
日は昇り，日は沈み，
その所に急ぎ，そこからまた昇る。
『旧約聖書』伝導の書：プロローグより[2)]

Ⅰ．社会の静態と動態：宗教的立場より

色は匂へど散りぬるを
わが世誰ぞ常ならむ
有為の奥山今日越えて
浅き夢見じ酔ひもせず

弘法大師の作といわれる「いろは歌」である。これは第一句から順に，

「諸行無常，是生滅法，生滅々已，寂滅為楽」

という『涅槃経』のなかの「諸行無常偈」の四句をいろはで詠んだものとされている。

この思想は仏教の三大原理である三法印（『大智度論　巻22』）をまとめて，

1）本稿は，日本太平洋コミュニケーション学会（現・日本コミュニケーション学会）1984年度年次大会において，“Communication Patterns: A Metabolic Approach”と題して口頭発表したものの前半部を，発展させ，独立させたものである。

2）中沢洽樹（1985）：『「空の空」——知の敗北』（山本書店），p．15. 中沢自身の訳である。

(1) 諸行無常，(2) 諸法無我，(3) 涅槃寂静

と表わされるのが常である。「諸行無常」とは「すべての現象は変化する」という意味であり，仏教思想の中心をなす無常観である。

中村元は「無常を観ずる思想はギリシアにもあった」[3] し，「人間がはかないつまらないものであるという自覚は，さらにさかのぼると，ユダヤにも古くからあった。」[4] という。「無常感は，インドでも，イスラエルでも，ストアの鉄人の場合でも，（中略）人間のあり方一般として無常を嘆いて」[5] おり，「このように無常を説くことは，幾多の文化圏に見られるところである」[6] と述べている。

「仏教によると，うつりゆくこと，変わることだけがあるのであり，あらゆる物体は運動しつつある力にすぎない。いかなる個体の状態も不安定であり，暫時的であり，過ぎ去るということだけが確実なのである。事物における形態や諸性質も恒久的なものではない」[7] とする仏教的無常観を力説する。また中村はヘラクレイトスにふれ，「特に変化相を強調したという点で，ヘーラクレイトスの思想は，仏教と一致している。（中略）さらにヘーラクレイトスは変化するという過程は永遠であると考えていた」[8] ことを指摘している。「万物は流転する (Panta rhei.)」という言葉はヘラクレイトス自身のものではないようであるが，彼が万象の常態を，川の流れの如く，動態であると観じていたことに変わりはない。

ユダヤ教，キリスト教ではどうか。旧約聖書学者　中沢洽樹は「伝導の書」について，「文学類型としては，ヨブ記や箴言などとともに，いわゆる知恵文学の中に入れられます。けれども，この書はヨブ記に劣らず旧約の中

3) 中村　元（1975）：『普遍思想　上　世界想史　2』中村元選集第18巻（春秋社）p．268
4) 中村　元（1975）：同掲書，p．269
5) 中村　元（1975）：同掲書，p．272
6) 中村　元（1975）：同掲書，p．273
7) 中村　元（1975）：同掲書，pp. 277-8
8) 中村　元（1975）：同掲書，p. 279

ではまったく異色の書で，当時の正統派から見ればまさしく異端の書であったと思われます。」[9] といっているが，「空の空，一切が空である。日の下でいかに労しても，そのすべての労苦は何の益があるか。」で始まるこの書に流れる虚無感は深く，読む者を救いのない実存の深淵に誘う。

かつてあったことは，またあろう，
かつてなされたことは，またなされよう。
日の下におよそ新しいことはない。
「見よ，これを，これこそ新しい」と
いうことがあろうか。それはわれらの前の
代々にすでにあったことだ。
前のことは記憶されず，後のことどもも，
さらに後の世に記憶されることはない。

めくるめくサエクルム（saeculum）の変遷，時代の交替。しかも歴史は繰り返し，人間の歴史には新しいものなどない，とコーヘレスはいう。このような「歴史の客体的永続性」はコーヘレスにとっては，「無意味だったのです。それを意味あらしめるのは『記憶』です。前の時代のことを今の時代の人々が記憶し，今の時代のことを後の時代の人々が記憶することによって初めて歴史が意味あるものとなり，その客体的永続性が主体的持続性となるのです。ところが人々は前のことをすぐ忘れ去り，今のことも後の人には伝わらず，後のこともさらに後の世には伝わらない。これが人の世の現実であり，この不毛性が『空』の重要な契機をなすもの」[10] であると中沢はいう。

一方，イスラーム学者　板垣雄三は，この移ろい行く現世は，永遠である「神の国と地上の国との抗争の場」[11] であるとするキリスト教に対し，「イ

9）中沢洽樹（1985）：同掲書，p. 11
10）中沢洽樹（1985）：同掲書，p. 23

スラームでは，精神と肉体，霊と肉を分離して考えることに反対なのであり，現世をただ空しい否定されるべきものだとは見ない。それどころか，現世を神の与える恩恵として感謝して受けとめ，そこで平和と幸福と繁栄を増進すべく積極的に生きることが勧められている。来世は現世でのそのような人間的努力への報酬なのであって，現世と来世とはかくしてイスラーム的に統一されなければならぬ，と言うのである。」[12] と述べている。

井筒俊彦によれば，アラブの歴史観は「この世のすべてのものは神の意思のとおりにあり，すべてのことが神の意思のとおりに動く。しかも瞬間，瞬間ごとにであります。ということは，世界は無始なる過去に一回だけ創られてそれで創造は終わるのではなく，どこまでも瞬間ごとに世界が新しく創造されていくということでありまして，神のこの瞬間的創造行為の連鎖が，世界，そして人間の歴史を形成するのであります。瞬間ごとにまったく新しく創造されるのですから，全体が切れ目のない一つの流れではありません。とぎれとぎれの独立した単位の連鎖であ」[13] るという。「因果律（そして人間の場合には自由意思）の否定を伴うこの非連続的存在観が，イスラームの正統派――スンニー派と呼ばれている非常に大きな，ほとんどイスラームの大多数を占める人々――の根本的な哲学なのであ」[14] り，このアラブ的歴史観に比べると，もう一つのイスラーム文化を代表するイラン的歴史観は，因果律的に，時間的にも空間的にも連続性を認める存在観であり，このシーア派の歴史観はアラブ的歴史観とは真正面から対立するものである。

シーア派の歴史観に大きく影響を与えたのがゾロアスター教であるとされる。岡田明憲によれば，「ゾロアスター教の特質をなすものとして，まず第一にあげられるのが二元対立の思想である。（中略）ゾロアスター教の二元論は，善と悪の対立抗争をもってその特徴とする。存在のすべてが善と悪のカ

11）板垣雄三／佐藤次高・編（1986）：『概説イスラーム史』（有斐閣），p. iii
12）板垣雄三／佐藤次高・編（1986）：同掲書，p. iii
13）井筒俊彦（1981）：『イスラーム文化』（岩波書店），p. 67
14）井筒俊彦（1981）：同掲書，p. 70

テゴリーに総括される。そして，この世界は善と悪の対立抗争する戦場となる」[15]のである。「ゾロアスター教徒は，世界は神々と悪魔たちの闘争の場として理解すると共に，ザラスシュトラによって説かれた，最終的な善の勝利を確信する。」[16]このような終末論的歴史観においては，現世は静的なものではなく，神々と悪魔たちの勝敗の結果による変化の連鎖と見なすことができる。

以上の考察でも明らかであるが，世界の大宗教では，現世（社会）を動態であるとみなしているといってよい。そこでは，社会の常態が動態であるがゆえに起因する諸々の人間的労苦を，信仰や叡智をもって超越させようとする。仏教でいう人生の苦悩の根本原因である四苦（生，老，病，死）も，八苦（四苦に，愛別離苦，怨憎会苦，求不得苦，五陰盛苦を加える）も，結局は，心身や環境の変化に対応できないときに感じる苦しみである。苦しみゆえに，人間は，太古の昔より，苦海からの解脱や，永遠の生命を希求し続ける。

Ⅱ．文化・社会の静態と動態：文化人類学・社会学的立場より

『方丈記』や『平家物語』を持ち出すまでもなく，日本人と仏教的無常観とは因縁浅からぬものがある。仏教的無常感あふれるこの世（this world）を表現する言葉に「うき世」という言葉がある。神保五彌は平安時代以来，日本人に親しく使用されてきたこの言葉について「日本人のうき世意識は，仏教的世界観から発した無常の世としての憂世，憂世である以上享楽すべき世であるとする浮世，憂世・浮世を包括しながら時間の流れの中のひとこまに過ぎないと見るうき世，風俗の流行変化はあっても，現実は動くものではないとするうき世がある」[17]という。そして「これはそのまま現代の日本人

15）岡田明憲（1982）：『ゾロアスター教――神々への賛歌――』（平河出版社），p. 10
16）岡田明憲（1982）：同掲書，p. 31
17）神保五彌（1984）：「うき世の思想」，相良亨／他・編『講座　日本思想　4　時間』（東京大学出版会），p. 221

のうき世意識でもあろう。」[18] と結んでいる。

日本人は，社会変動や環境の変化，または文化の変化に適応するのが巧みであるといわれる。近世以降の日本の歴史がそれを証明している。変化に強い日本人という像が描けるようである。これはなぜか。

この世を変化相ととらえる日本人の一般的傾向が，このことと大きく関係していることが予想できる。「うき世」で起こることにどうせ変化はつきものであると考えているのではないか。栄枯盛衰。流転真如。輪廻[19]転生。とかくこの世はままならぬ。なるようにしかならないもの，等々。古くは民話や能や歌舞伎の題材にも，日本人の日常の会話にも，歌謡曲，とくに演歌の歌詞にも，世の中の変化，境遇の変化（貴種流離など），人の心の変化などはしばしば採り上げられてきた。まことにはかない生命の桜[20]に古来より変わらぬ愛情を持ち続け，開花の季節ともなると，花の日々の変化を話題にし，「桜前線」なるニュースが各テレビ局から全国に流れる。もうその頃ともなれば，気もそぞろ，花見に出掛けて，季節の変化を実感として嚙みしめるために花の下に宴をはる。酔えば無礼講。いち早く此岸より彼岸へ渡ってしまった者の勝ちである。酔ってしまえば，これはもうこの世のことではない。あの世（that world）のことなのであるから，全て水に流すより仕方がないということと相成る。季節感とは，ひっきょう，自然の時空的変化に敏感になることであり，かつ，それに対し肯定的に感応することを意味する。

怖いものの代表のようにいわれる「地震，雷，火事，親父」も，見方を変えれば，「負の変化」と解釈できる。「太平の眠りを覚ます蒸気船（上喜撰）……」と同様に，災害は太平の夢を破って，突如として現れる。安定より変化への豹変である。人間本来無一物と思うのか，泣く子と地頭にはかな

18）神保五彌（1984）：同掲書，p. 221

19）中村　元（1981）：『仏教語大辞典』（東京書籍）によれば，「輪廻」の原語（サンスクリット）“saṃsāra”は，現代サンスクリットおよびヒンディー語では「世の中」，「世界」の意で用いる，とある。

20）日本では生命のはかなさに例えられるが，ワシントンのポトマク河畔の桜は延々数週間も咲き続けると聞く。

わぬと思うのか，はたまた，長いものには巻かれろと思うのか，この「負の変化」からの精神的回復（頭の切り換え）が早いのも日本人の常である。

このように日本人は変化を享受，あるいは甘受する。しかも，この文化特性は当分は変化しそうにない。一体何が日本人を変化に強い民族に仕立て，何がその状態を変化させないでいるのか。さらに一般化していえば，文化の生成と文化変化のメカニズムはどうなっているか。また文化システムを安定化（秩序化；homeostasis または stasigenesis）させる仕組みはどのようになっているのか。つまり，文化の動態と静態を司どっているメカニズムはどのようになっているかということである。

「成立期の社会学は，全体社会を対象とした科学であろうとした。」[21]全体社会の内部の諸関連，つまり，社会構造と，その全体としての歴史的変化の法則，つまり，歴史法則を求めていた。コントやスペンサー風にいうならば，静学（statics）と動学（dynamics）との区分をしつつ全体社会を対象としていた。

個人の変化は集団を変え，集団は文化を変える。また文化変化は社会をも変えうる。社会の変動は文化変化を促し，集団の行動様式を変え，個人の価値観を変える。時系列に沿って，個人も，文化も，社会も，二方向の流れの中で常に変化し，あるいは変動する。宗教では個人のライフ・サイクルのレベルで変化をとらえ，むしろその変化を超越させることに力点を置く。一方，文化人類学や社会学では文化や社会の異なる形態や領域における量的または質的な変化（文化変容，文化変化，社会変動）を研究対象とする。

社会の常態を動態または変動とし，静態または秩序を，むしろその一形態とみなす観点はないのか。

ウィルバート・E・ムーア（Wilbert E. Moore）は社会の常態を動態であると観る。彼は緊張処理体系として社会をとらえ，変動の遍在性（ubi-

21）北川隆吉・監修（1984）：『現代社会学辞典』（有信堂），p. 10
22）Moore, Wilbert E. (1963): *Social Change,* Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, pp. 1–21

quity）を指摘しつつ，変動の普遍的な源泉として，社会システムに内在する弾力性（flexibilities）と不確実性（uncertainties）をあげる。彼は狭義の機能主義理論に批判を加え，「均衡モデル」では社会の秩序と変動という二元論的適用領域の後者に属する諸問題が扱えないとする。[22] リプセット(Seymour M. Lipset)による批判[23]もあるが，スワンソン(Guy E. Swanson）は「ムーアもリプセットもたぶん同意するだろうが，彼らは別々の事柄について語っているのである。リプセットは主要な変動——とくに価値の変動——にしか興味がない（価値とは行動のために望ましい目標や目的を規定する規範であり，われわれが行動するさいに用いるべき単なる手段ではない)。ムーアはおよそどんな変動にでも興味を示している。」[24]と述べ，この議論がかみあっていないことを指摘している。

また，ムーアは産業化を文化変容の過程として見ていたことででも広く知られている。

その他にも数多くの社会学者[25]や文化人類学者[26]が進化論的立場などから社会変動や文化変化，文化変容について考察しているが，それらを紹介することが本稿の目的ではないので，これで一応の区切りとする。

松原洋三・訳（1968）：『社会変動　現代社会学　6』（至誠堂）

23) Lipset, Seymour M. (1963): *The First New Nation: The Uited States in Historial and Comparative Perspective,* New York: Basic Books, Inc., pp. 102–3

24) Swanson, Guy E. (1971): *Social Change,* Glenview, Illinois: Scott, Foresman. 浜口晴彦・監修（1979）：『社会変動の組織化』（早稲田大学出版部), p. 67

25) Moore, Wilbert E. & Cook, Robert M. (eds.) (1967): *Readings on Social Change,* Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall.
浜口晴彦・監修（1979）：同掲書巻末に詳細な参考文献リストがある。
Sheldon, Eleanor B. and Moore, Wilbert E. (eds.) (1968): *Indicators of Social Change,* New York: Russell Sage Foundation. に詳しい。
他に Nisbet, Robert A. (1970): *The Social Bond: An Introduction to the Study of Society,* New York: Alfred A. Knopf など。

26) Murdock, George P. (1949): *Social Structure,* New York: Macmillan, Steward, Julian H. (1955): *Theory of Culture Change: the methodology of multilinear evolution,* Urbana: University of Illinois Press など。

Ⅲ．文化・社会の静態と動態：コミュニケーション論の立場より

「コミュニケーションを，最も，広い意味において，文化構造の能動相(the active aspect) として考えてもよいのではないか。」(R. L. バードウィステル)[27]

第4回　文化とコミュニケーションに関する国際会議 (International Conference on Culture and Communication) は上記のバードウィステル (R. L. Birdwhistell) の示唆的表現にもあるように，基本的な相互作用的パラダイムを反映する学術研究の発表を意図して，1981年，ペンシルバニア州のテンプル大学において開催された。その会議における発表論文集[28]の巻頭で，その編集者であったサリ・トーマス (Sari Thomas)[29]は，「このモデル（筆者注：上記引用文参照）が提言しているところを簡単にいうと，社会的領域は二つの相関関係的見地より検討されてもよいのではないか。つまり，第一の見地は，外から『文化』として，第二の見地は，内から『コミニケーション』としてである。この意味において，文化は時空のいかなる点においても人間的組織の『構造』として，また文化は(1)物の状態や(2)基準化された行為（例えば，医療業務，農業技術）や(3)世界観や価値観から成るものとして見ることもできよう。明らかに，これらの文化的諸相はどれも静態的現象ではない。しかも，これらのものが時を越えて安定し，不変に見えても，その秩序を維持するためには，（必ずしも意識的ではないのであるが），かなりのエネルギー量が消費されているに違いない。その（維持または変化のための）エネルギーでもあり，またそのエネルギーをつくる『システム』は

27) Birdwhistell, R. L. (1970): *Kinesics and Context: Essays on Body Motion Communication,* Philadelphia: University of Pennsylvania Press, p. 251

28) Thomas, Sari (ed.) (1984): *Communication Theory and Interpersonal Interaction: Studies in Communication Volume 2,* Norwood, New Jersey: Ablex Publishing

29) Temple University コミュニケーション学教授である。

『コミュニケーション』として理解してもよいのではないか。」[30]と述べ，文化のスタシゲネシス (stasigenesis) とムタゲネシス (mutagenesis) という二つの形態生成の過程と仕組みに注目している。

マイケル・H・プロッサー (Michael H. Prosser) は文化もコミュニケーションも共にプロセスであることを指摘する。「人生にしろ，文化にしろ，コミュニケーションにしろ，すべて進行し変遷し進化しつつあるプロセスで，その初め・終りを正確に指摘できるようなものではない。このようなプロセスを人為的に分離して，プロセスとして研究・分析の対象にすることもたしかにあるが，このようなプロセスは本来長期間にわたる個人史・文化史あるいは人類の歴史のほんの一部でしかありえない。われわれは自分たちをとりまく環境の中で生涯を通じて自己概念を形成する。自分たちが属する特定の文化と普遍的な人間レベルの文化が総合的な発達をとげたために，われわれは自己同一性の意識を育みやすくなってきた。個人としてのわれわれはつねに変化している。（中略）どのプロセスをとっても，すべて進行中のもので，われわれがつねに文化の伝統・規範・価値観を創り出し，これを次世代に伝承できるのは，まさに社会的コミュニケーションという進行性のプロセスがあるからにほかならない。」[31]

プロッサーは，さらに，「コミュニケーションと文化には本来対立という概念が内在しているのが基本的な構図である」[32] ことを指摘しつつ，文化の安定と変化にみられる恒常的対立を考える。彼はジュールズ・ヘンリー (Jules Henry) が「人間が一方では文化の安定を，他方では文化束縛からの解放を同時に追求しようとする矛盾から，根本的な対立が生じる」[33] とする

30) Thomas, Sari (ed.) (1984): *Ibid.*, p. ix
31) Prosser, Michael H. (1978): *The Cultural Dialogue: An Introduction to Intercultural Communication,* Boston, Mass.: Houghton Mifflin, p. 2
岡部朗一・訳 (1982) ：『異文化とコミュニケーション』（東海大学出版会), p. 2
32) Prosser, Michael H. (1978): *Ibid.*, 岡部朗一・訳 (1982) ：同掲書, p. 24
33) Henry, Jules (1963): *Culture against Man,* Middlesex, England: Penguin, p. 50

主張を紹介する。また，マーガレット・ミード（Margaret Mead）のいう三つの文化類型，すなわち，老年世代型，同年世代型，若年世代型[34]に代表されるそれぞれの文化観に触れ，文化類型の原型である老年世代型にみられる，自分たちの文化は不変であるとする見方や，これとは対照的な同年世代型文化を説明する。ミードはいう，「われわれは現在新しい文化類型を作りつつある時期にさしかかっていると思う。（中略）私はこの新しい文化を若年世代型文化と呼ぶ。この未来の文化では親とか祖父母ではなく子供が主役だからである。」（1970：p. 68）このミードの予測に対してプロッサーは「過去の文化では今日の問題に対処できない。また反対に未来の若年世代の文化ではこんどは変化のスピードが急激すぎて，予測不可能な危険な側面をもつことになりかねない。われわれが直面する問題への対処法として，どの場合でもこれらの両極端を避けることが賢明であろう。適度な安定と変化のバランスを完全に保つということは，口でいうほどは容易なことではない。自国文化内でのコミュニケーションにしろ異文化間コミュニケーションにしろ，文化がその成長過程でつねに変化していることを留意しておくべきである。われわれはこの変化から逃れることはできない。われわれが自国文化内で適度な変化を時には抑止したり，また時には促進したりしていることを十分に意識すべきである。」[35]と結んでいる。

コミュニケーションと文化は常に進行性のプロセスにあることは既に述べた。しかも両者は常に手を取り合い，相互（reciprocal）関係において登場する。パース（W. B. Pearce）とスタンバック（M. H. Stanback）とカン（K. W. Kang）は，人間に関する研究の理論構築に研究者自身の文化が入り込むことを指摘し，文化を「越えた」（*trans*cultural）文化とコミュニケーションの理論造りに関心を示している。「人間の行為と社会の実体との間にある相互的因果関係，あるいは形態生成的関係は，まず第一にコミュニ

34) Mead, Margaret (1970): *Culture and Commitment: A Study of the Generation Gap,* Garden City, New York: Doubleday, pp. 52–8

35) Prosser, Michael H. (1978): *Ibid.*, 岡部朗一・訳（1982）：同掲書，p. 58

ケーションとして研究すべきである。」[36]としながらも，「しかしながら，文化とコミュニケーションとの間のこの相互的因果関係，あるいは形態生成的関係は概念的にも方法論的にも難しい。相互的因果関係について英語で明瞭に思考したり書いたりすることは，その文法が線型的であるがゆえに困難である。また，ほとんどの西洋の研究方法は線型的因果性や，出来事の間の相関関係をテストするように仕組まれている。」[37]と述べている。

E．T．ホール (Edward T. Hall) のように「文化はコミュニケーションである」[38] と言い切る者から，上述のパースたちのように「方法論的に難しい」としながらも二者の関係を探求する者までおり，世はまさに戦国時代の様相である。

以上の考察のように，あるコミュニケーション研究者たちは，文化の静態と動態を，いわば両者をセットにして統合しようとしており，文化の生成との関係でコミュニケーションを理解している。つまり，われわれは文化と共にコミュニケートするのである。プロッサー流にいうと，われわれひとりひとりが「文化コミュニケーター」[39]なのである。

Ⅳ．文化生成の統合モデルを求めて：

文化の定義は数多くあり[40]人心を惑わせるところである。コミュニケーシ

36) Pearce, W. B., Stanback, M. H., Kang, K. W. (1984) : Some Cross-Cultural Studies of the Reciprocal Causal Relation between Communication and Culture, in Thomas, Sari (ed.) (1984) : *Ibid.*, p. 7

37) Pearce, W. B., Stanback, M. H., Kang, K. W. (1984) : *Ibid.*, p. 7

38) Hall, Edward T. (1959) : *The Silent Language,* Greenwich, Conn : Faucett Publications, pp. 93–8
國弘正雄他・訳 (1966) ：『沈黙のことば』（南雲堂), pp. 130–9

39) Prosser, Michael H. (1978) : The Cultural Commnicator, in Fischer, H. D. and Merrill, J.C. (eds.) : *International & Intercultural Communication* 2nd Edition, pp. 417–423

40) Kluckhohn, Clyde & Kroeber, Alfred (1952) : Culture : A Critical Review of Concepts and Definitions, (Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology 47 : 1)

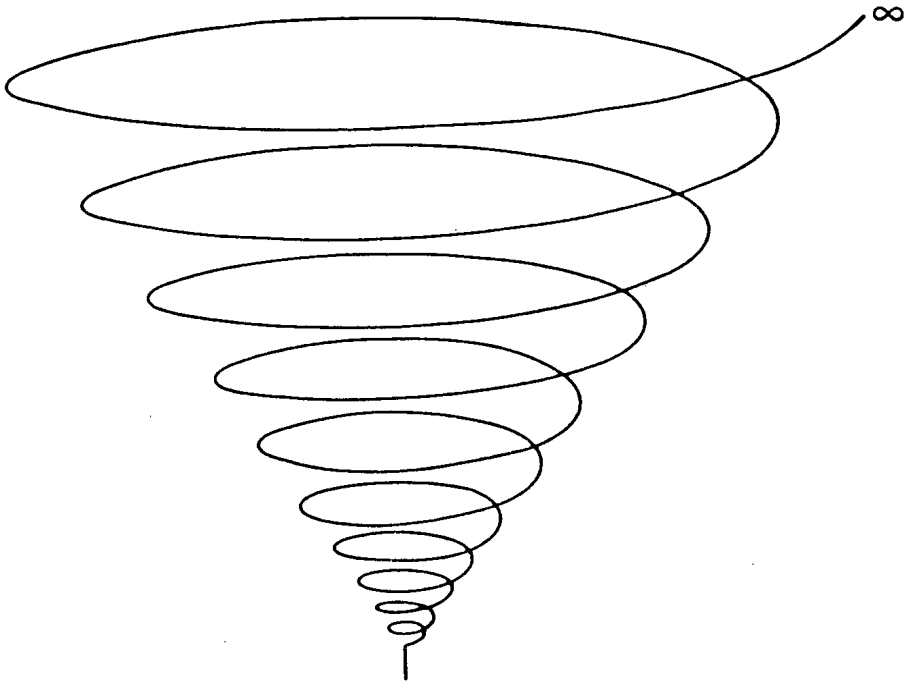


図1　F. E. X. ダンスのコミュニケーション・モデル

ョンの定義もこれといい勝負になるようだ。F. E. X. ダンス (Frank E. X. Dance) とC. E. ラーソン (Carl E. Larson) によると，彼らがスピーチ・コミュニケーションに関連する雑誌から集めた定義の数は126にも達した。[41]

この事実はいったい何を物語っているのか。混乱状態としかいいようがない。文化の定義がこのように不安定であれば，文化と相関関係の高いコミュニケーションの定義もまた不安定となる。またその逆も真実である。

前出のパースたちは，コミュニケーション理論は抽象度が高いもののほうが良いと主張する。[42] したがって，その理論を支えるモデルも抽象度が高くなる。ダンスのコミュニケーション・モデルは，図1のように螺旋形 (helix) である。[43] コミュニケーションの動的側面，常に進行する過程であるこ

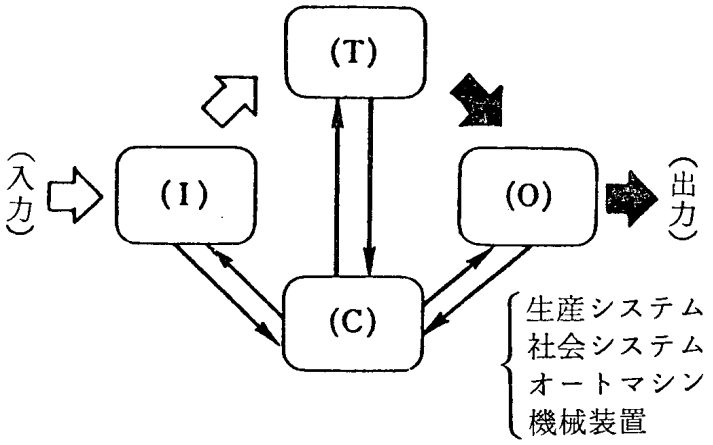
41) Dance, Frank E. X. & Larson, Carl E. (1976): *The Functions of Human Communication: A Theoretical Approach,* New York Holt, Rinehart and Winston, pp. 171–192

42) Pearce, W. B., Stanback, M. H., Kang, K. W. (1984): *Ibid.*, pp. 3–4

43) Dance, Frank E. X. (1967): Toward a Theory of Human Communication,

と，情報の集積性，変化などをよく物語っている。ダンスは，コミュニケーションと変化との関係を説明しつつ，「コミュニケーションに対するエントロピーの減少と変化との関係を考えると，コミュニケーションも過程として見なければならないことがおのずからわかる。そのすべての順列におけるコミュニケーションに内在する過程としての生得的な性格は，コミュニケーションがエントロピーの減少と変化という，より基本的な二重の過程に対し従属的であるという事実のためである。エントロピーの減少が停止し，変化が止まると，また必然的に，コミュニケーションもとだえる。コミュニケーションはこれらの二重の過程を通して造られる情報に作用するので，コミュニケーションそれ自体は常にそれらとは相互作用的に関わり，かつ過程的である。」[44]といい，コミュニケーションと変化との関係性を強調している。

もう一つ注目に値するモデルに市川亀久彌のITOC渦系がある（図2）。[45]



（完成したオープン・システム）
＊トータル・システムの基本パターン

図2　ITOC 渦　系

in Dance, Frank E. X. (ed.): *Human Communication Theory: Original Essays,* New York: Holt, Rinehart and Winston, p. 296. 図1を参照せよ。

44) Dance, Frank E. X. & Larson, Carl E. (1976): *Ibid.*, pp. 59–60

45) 市川亀久彌（1960）：『独創的研究の方法論』（三和書房）
市川亀久彌（1967）：『創造工学』（ラテイス）
市川亀久彌（1970）：『創造性の科学』（日本放送出版協会）

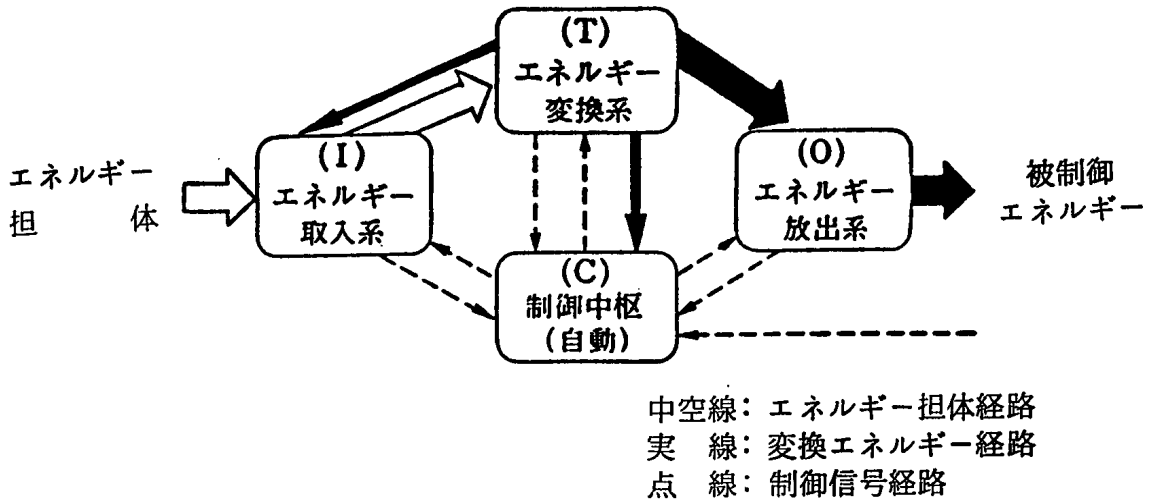
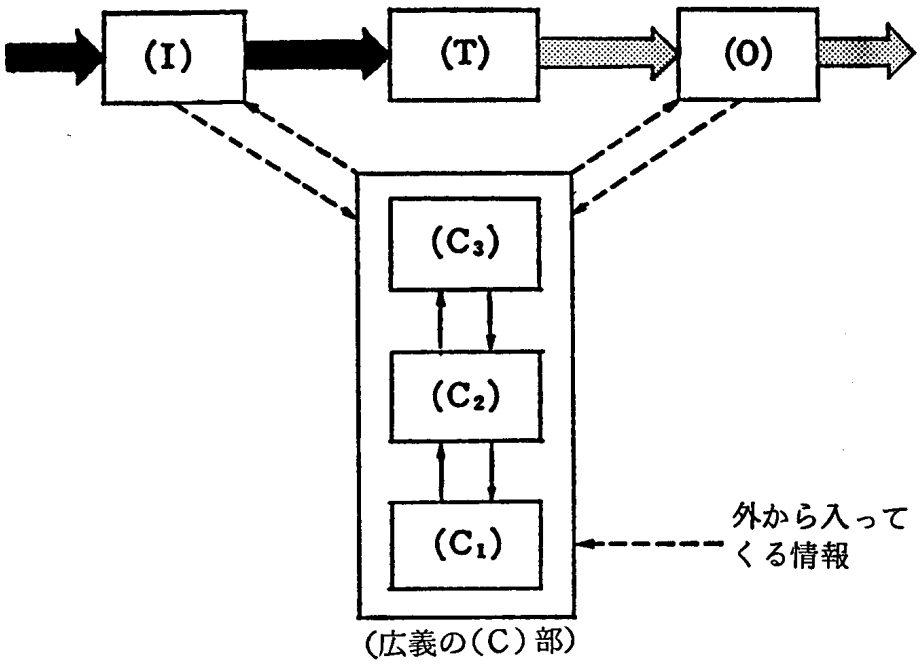


図3　行為主体の技術模型



C_1：価値観，宗教，思想，科学，学問，芸術
C_2：社会システムの直接のコントロールに関係した情報システム
（政治・行政・裁判）
C_3：生産・および流通の両システムを直接コントロールすること
に関係した情報システム（ビジネス）

図4　社会システムにおける制御機構

このモデルは，もともとコミュニケーション理論のために考えられたものではない。独創性の研究の中から生まれた創造工学の理論である。しかし，この理論とモデルを適用できる領域は極めて広範囲に渡り，最も広い意味にお

いて，コミュニケーション理論として解釈できよう。

図2のITOC渦系について，

「生物機能を含んだトータル・システム・パターンの基本構造を示したものであります。これは後述するように国家をも表示することができ社会システムの基本にまで通じているのであります。そして，ITOCの四つのエレメントによって形づくられたトータル・システム・パターンは，(T)のサブシステムによるエネルギー変換機能と，(C)のネガティヴ・フィードバック制御機能との結合を実現したオープン・システムを表わしているものであります。それは動的自律系の世界における<最終到達系>を表わしているものであります。しかも，その全体的な動作メカニズムをよくみると系外からの物質やエネルギーをとり入れて連続的に変換するメカニズムの(T)が，(C)の制御メカニズムによって継続的に作動し続けている構造になっているものです。したがって，これは前者の(b)（筆者注：渦巻，台風，渦状星雲等の自然渦系を指す）にみた渦系のメカニズムの延長線上に位するものといえます。よって，このパターンの動的自律系のことを，別名，ITOC渦系と呼んでいるのです。」[46]

と市川は説明している。なお，(I)は入力，(O)は出力を意味する。

図3と図4は，図2の応用編ともいうべき変型である。それぞれ，エネルギー系，社会システムを表わしたものである。

このモデルが優れている点は，①フィードバック機構が考慮されていること，②旧情報（文化と呼んでよい）からの制御，つまり，安定と変化への配慮があること，③(O)からの出力は，次の系の(C)に入り込み，制御プログラムは累積的に強化される。

そして，市川は続ける，

46) 市川亀久彌（1977）：「全自然学への展望」『創造の世界 23』（小学館），p. 57

「文明とか文化というものは，まず成熟した渦系に対して，それを外乱によって消滅するのを防ぎ，よりレベルの高い存続パターンの自由度を高める，ということへの螺旋運動的な展開活動にほかならないものと思います。すなわちそれは当の渦系そのものの質的な発展にポジティブ・フィードバックを達成していく性質を内在していることが特徴的であります。すなわち，文明とは動的自律系がその環境適応過程において獲得した人工進化の内容にほかならないのであります。われわれがつくりあげた社会システムなどというものの意義もかかる人工的進化のパターンが，行為主体としての動的自律系にとって自らの存続の安定性と発展性をもたらしてくれるからにほかならないのであります。」[47]

これはもうコミュニケーション論の領域である。今まで展開してきた議論のまさに線上にある。

ノーバート・ウィーナー（Norbert Wiener）は，「どのような組織体でも，情報の獲得・使用・保持・伝達のための手段をもつことによって，恒常作用（homeostatic process）が営まれる。」[48]と述べているが，これは市川のITOC渦系（特に図3，図4）に照らしてみると歴然としてくる。

ウィーナーのフィードバック機構に関する考え方は，コミュニケーション行為を説明するためには積極的に採り上げなければならない。ウィーナーの解釈によれば，「学習は本来的には一種のフィードバックであって，行動のパターンが過去の経験によって修正をくわえられる」[49]ことである。人間は生まれ落ちてから，主として，通時的コミュニケーションからは文化の継承

47）市川亀久彌（1977）：同掲書，pp.71–2

48）Wiener, Nobert (1961): *Cybernetics,* 2nd edition, Cambridge, Mass.: M. I. T. Press 池原止戈夫他・訳（1962）：『サイバネティックス　第2版』（岩波書店），p. 194

49）Wiener, Nobert (1950): *The Human Use of Human Beings: Cybernetics and Society,* New York: Houghton Mifflin.
池原止戈夫・訳（1954）：『人間機械論：サイバネティックスと社会』（みすず書房），p. 71

を，また，共時的コミュニケーションからは文化の共有という機能を果たす。学習はこれらの二系列のコミュニケーションでなされる。そしてこれらの二系列のコミュニケーションのフィードバックの量のバランスが最もうまくとれているときに，文化のホメオスタシスが得られる。

ウィーナーの学習機械に関する考察は鋭い。彼は，「一般に，学習機械は非線型なフィードバックによって動作する」[50] ことを突き止めた。これは線型的コミュニケーション・モデルからの脱皮を示唆している。シャノン＝ウィーバー（Claude Shannon and Warren Weaver）の数学的モデル[51]等の線型的モデルが制限的条件の下でしか使えないことを意味する。多くは二者間（dyadic）の限られた時系列の下でしか用いることは不可能であり，文化や社会との関係性を説明するには，これらのモデルはあまりにも静的であり，適用範囲が狭い。

サイバネティックスの持つ有効性と適用性の大きさをいち早く看破し，コミュニケーション理論にまで育てた研究者に吉田民人がいる。[52] 彼はウィーナーに大きく影響を受けながら，自然界を「物質・エネルギー」系と「情報」系とに分ける。吉田はこの「新しい物質＝情報的自然観」を進化論的に分析し，ラスウェルの図式として知られる従来のモデルを批判した。彼はラスウェルの「内容分析」は伝達システムの情報内容を送信過程でとらえたにすぎないという。[53]

サイバネティックスのコミュニケーション理論への応用というよりは，「通信工学の分野から提出された情報理論にコミュニケーション論研究者たちがもっと関心をもっていたならば，コミュニケーション科学の研究は，20年ないしは30年の，誤った見当違いの活動をする必要はなかったかも知れな

50）Wiener, Nobert (1961): *Ibid.*, 池原止戈夫他・訳（1962）：同掲書，p. 208
51）Shannon, Claude and Weaver, Warren (1949): *The Mathematical Theory of Communication,* Urbana, Ill.: University of Illinois Press, p. 98
52）吉田民人（1967）：「情報科学の構造――エヴォルーショニストのウィーナー的自然観」『今日の社会心理学／4　社会的コミュニケーション』（培風館）
53）吉田民人（1967）：同掲書，pp. 276-8

い。」[54]というのは，イノベーション（innovations）の普及というコミュニケーション研究で著名なエヴァレット・M・ロジャーズ（Everett M. Rogers）[55]である。彼の研究対象は，いわば，意図的な伝播や，人工的な文化受容の発生過程である。同じく普及学研究の宇野善康の異文化間屈折理論[56]も，また，近年とみに研究が盛んになってきた異文化間コミュニケーション論（Intercultural Communication であって，Cross-cultural Communication ではない），例えば，サモーバー＝ポーター＝ジェイン（Larry A. Samovar, Richard E. Porter, Nemi C. Jain）の異文化間コミュニケーション・モデル[57]にしても，前述の市川のモデルのほうが説明が楽である。ようやく，コミュニケーション科学研究も総合的な方向に向かいだしたようである。

V．文化とコミュニケーションの関係式：
――情報代謝モデルを考える

以上の議論をふまえて，文化とコミュニケーションとの関係を考察してみよう。

1.　文化とコミュニケーションの関係式について：

文化は情報と関数関係にある。情報の機能化のプロセスをコミュニケーションという。このプロセスを終了した情報が文化化（広義：culturalization

54) Rogers, Everett M. (1986): *Communication Technology: The New Media in Society,* New York: The Free Press, p. 95

55) Rogers, Everett M. with Shoemaker, F. Floyd (1971): *Communication of Innovations: A Cross-Cultural Approach,* Second Edition, New York: The Free Press 宇野善康・監訳（1981）『イノベーション普及学入門』（産業能率大学出版部）などの他，多くの著作がある。

56) 宇野善康他・著（1982）：『国際摩擦のメカニズム――異文化屈折理論をめぐって――』（サイエンス社）

57) Samovar, Larry A., Porter, Richard E., Jain, Nami C. (1981): *Understanding Intercultural Communication,* Belmont, Cal.: Wadsworth, pp. 27–9 西田　司他・訳（1983）『異文化間コミュニケーション入門』（聖文社），pp. 35–7 Samovar, Larry A. and Porter, Richard E.: *Intercultural Communication: A Reader,* Third Edition, Belmont, Cal.: Wadsworth, pp. 32–4

[58])されて，文化をつくる。こうしてつくられた文化は文化化(狭義：enculturation) 情報として情報化 (informationalization [59]) され，次の世代へ継承される。その関係式はつぎのようになる。

$$C=f(I) \qquad \cdots\cdots(1)$$

但し，C=文化

I=情報

文化の生成と変化の過程に注目すると，情報は，文化化情報，文化変化情報，文化無変化情報の3類型に類別することができる。

文化の生成過程 (morphogenetic process) には，

1. 安定的生成 (stasigenesis)
2. 変化的生成 (mutagenesis)
3. 無生成 (agenesis)

とがある。それぞれ文化化情報，文化変化情報，文化無変化情報の機能化により発生する。

以上の3類型の情報を記号で表すと，

・文化化情報$=I_s-i_s$

・文化変化情報$=I_m-i_m$

・文化無変化情報$=I_a-i_a$

但し，$C_n=n$時点での文化の総量とすれば，

$I_s=C_{n-1}$ を情報化した旧情報。メモリー・プロセシング（後述）開始前の文化化情報の総量

i_s=文化化情報のうちのメモリー・プロセシングを終えた分

I_m=メモリー・プロセシング開始前の文化変化情報（新しい情報）の総量

i_m=文化変化情報（新情報）のうちのメモリー・プロセシング

58) 筆者はこの語を「文化に変えること」の意味で用いている。“enculturation” の意味ではない。

59) 筆者の造語である。筆者はこの語を「情報に変えること」の意味で用いている。

を終えた分

I_a＝メモリー・プロセシング開始前の文化無変化情報の総量

i_a＝文化無変化情報のうちのメモリー・プロセシングを終えた分

すなわち，

$$C_n=f\{(I_s-i_s)+(I_m-i_m)+(I_a-i_a)\} \quad \cdots\cdots(2)$$

これを整理して，

$$C_n=f\{(I_s+I_m+I_a)-i_M\} \quad \cdots\cdots(3)$$

但し，$i_M=i_s+i_m+i_a$

＝3類型の情報の総量のうちのメモリー・プロセシングを終えた分の総量。メモリー情報と呼ぶ。

2.　文化化情報（I_s，i_s）について：

コミュニケーション行為が備える重要な機能の一つである情報淘汰機能により，表舞台に残すか，メモリーに組み込む（保存する）か組み込まない（消去する）かは別にして，思想，価値観，行動様式などを学習させ，文化の継承（維持）や退化（devolution）を司どる情報をいう。世代間に広義のコミュニケーションが多くあればあるほど文化は安定し，次の世代に文化 C_{n-1} の多くが継承される。文化が次の世代に継承されるには，文化はいったん情報化（informationalization）されて伝えられる。しかし，すべての文化が伝わるとは限らない。コミュニケーションには情報淘汰機能があるからである。情報化された文化，すなわち I_s であるが，その一部は，いわば，人びとの記憶の深層に放置されたり，記録をされて，情報活動の表舞台から去っていく。また他の一部はその記録すら遺棄されたり，完全に記憶から消え去って，その行動様式や価値観は世代間の継承がなされないで，次の世代にはその文化要素は消え去ることとなる。情報には，①活性情報（Active Information），②休眠情報（Dormant Information），③不活性情報（Inert

Information）の3種がある。いわば，火山活動における活火山，休火山，死火山の分類にそれぞれが相当するといってよい。そのうち②と③をメモリー情報と呼ぶこととする。

したがって，文化化情報にはメモリーに関するプロセシングが行われる前の情報 I_s と，メモリーに関するプロセシングがすでに行われた後の情報 i_s（メモリー情報の一部）とがあり，n 時点での文化化情報は $I_s - i_s$ となる。

3. 文化変化情報（I_m，i_m）について：

文化化情報が，文化化（enculturation）に深く関わり，主として文化の安定的生成を司どるのに対して，文化変化情報は，文化変容を含む文化変化および文化進化（evolution）という変化的生成を主に司どる。

文化変化情報は主として新情報であるが，なかには休眠情報から表舞台に出てくる場合もある。温故知新などがそれに当る。これらの情報のほとんどは単用情報として情報淘汰される。しかしながら，イノベーション，例えば，革命など大きな社会変動となるときには，情報の累積的で急な増加と，複合的な情報の交流（コミュニケーション）により，二次情報，三次情報，高次の情報となるにつれて，その情報は歪み，新しい情報がそれに加わり，ついには大きな流れとなって，その流れを手中に入れた者の勝利となる。新しい文化・社会の誕生である。いや，そういい切るのはいささか早計であろう。それらの新しい文化・社会システムは，来るべき次の世代に継承されなければ，すなわち，情報淘汰機能の審判を受け，活性情報の地位を保ち続けなければ文化とはならない。

異文化間コミュニケーションもこの文化変化情報の多い分野である。したがって，当事者の頭脳にある慣れ親しんでいる文化システムに，程度に差はあれ，揺さぶりがかけられることとなる。その異文化システムの制御装置の機能が微妙に異なって働くのである。意図的であるか否かに関わりなく，一度その制御装置のメカニズムを理解してしまうと，その新しい装置と旧い装

置が，対立したり，分立したり，融合したり，はては，どちらかが消滅したりもする。文化の変化的生成，つまり，文化のホメオスタシスを求めながらの変化，すなわち，新陳代謝（metabolism）である。

文化はこのように，同化（anabolism）や異化（catabolism）を繰り返しながら，激しく情報に反応していく。

4.　文化無変化情報（I_a，i_a）について：

メモリー・プロセシング，つまりメモリーに組み込む（保存する）か組み込まない（削除する）かは別にして，思想，価値観，行動様式に変化をもたらさない情報をいう。

この文化無変化情報には，メモリーに関するプロセシングが行われる前の情報 I_a と，メモリーに関するプロセシングがすでに行われた後の情報 i_a とがある。

常に，$I_a - i_a = 0$となる関係である。

文化無変化情報には次の種類がある。

①記憶にとどめたり，記録したりして情報の保存（メモリー化）がなされるが，すぐには行動の変化や価値観の変化を伴わない情報である。将来，記憶／記録より取り出し（再生），I_m 情報として変化に関係する可能性を持つ。しかし時の推移とともに記憶や記録から消えてしまう情報も多い。休眠情報である。

②過去においてすでに一度以上現れたことのある情報で，I_s，I_m，I_a のいずれかにすでに類別された既出の旧情報（耐用情報）である。n 時点では i_a 情報となり，保存されず捨てられる（非メモリー化）こととなる。不活性情報である。

③記憶にとどめたり，記録すること無く，情報の保存がまったくなされない（単用情報）で，行動の変化，価値観の変化に関係しない情報である。意識的な場合（無視）と無意識な場合（看過，忘却）とがある。

不活性情報である。

5. メモリー情報（$i_M = i_s + i_m + i_a$）について：

休眠情報と不活性情報とがある。芝居と俳優との関係に例えると，①活性情報は表舞台で今出演中の俳優である。②休眠情報は舞台裏で出番を待機中の俳優である。そして③不活性情報とは役がつかなかったり，役からおろされた俳優である。なかには俳優を廃業する人もこれに入ろう。要するに，情報淘汰（選択）機能により，活性情報に入れられず，人びとの記憶には常になく，いつでも使用できるという状態にない情報のことである。

しかし，休眠情報が耐用情報として活性化することもある。そして，その情報は再び情報淘汰機能の審判を受けることとなる。

以上の考察のごとく，情報は代謝運動を繰り返し，他の情報と結合したり，分離したり，新しい情報に生まれ変わったり，また死滅したり，さまざまな変転を繰り返す。コミュニケーションは，このような情報の代謝運動と，文化の生成運動に関わって，いわば，仲介者（The Mediator）として機能していると筆者は考える。

Ⅵ. 新しい理論構築に向けて：

この議論は，「文化とコミュニケーションは同じではない。また，コミュニケーションと情報とを混同・混用してはならない」という二点からの考察であった。

以下のように例えれば，情報（I）とコミュニケーション（c）と文化（C）の関係は理解しやすいかもしれない。

情報＝「設計（図）」説である。

①設計（図）（I）にしたがって作品（C）を作る（c）……（文化化情報：活性化）

文化とは獲得した情報に基づいてコミュニケーションが作った作品である。

今までの議論に当てはめてみよう。

②設計（図）を改良する　……（文化変化情報：活性化）

③設計（図）をそのまま保存する　……（文化無変化情報：休眠化）

④設計（図）を紛失する／設計（図）が存在することすら忘れてしまう……（文化無変化情報：不活性化：無意図的）

⑤設計（図）を破り捨てる／設計（図）を無視する……（文化無変化情報：不活性化：意図的）

他にもっと考えられるかもしれないが，所期の目的は達した。

コミュニケーションとは交互（reciprocal）に発生する二元的過程，文化をつくる過程と情報をつくる過程，すなわち，

①情報の文化化（the culturalization of information）

②文化の情報化（the informationalization of culture）

を司どる仲介的行為である。コミュニケーションは情報と文化の間に存在する。したがって情報なしのコミュニケーションは存在しないし，また，コミュニケーション行為がなければ文化の継承（文化化）も文化変化も成立しない。したがって，文化は存在しない。

思想，価値観など，頭脳の中の情報行為の情報内容，個体内における情報行為の情報内容それ自体は文化ではない。

文化とは，行動化（表現を含む action）されて初めて形成されるものである。どんなに良い構想を持っていても，実際に絵を画かなければ，それは絵ではないし，実際に小説を書かなければ，それは小説ではない。何らかの形にして表現しなければ，それはないに等しい。情報の機能化がなければ，文化は生まれない。情報と文化は同じではない。

では文化とは何か。ギアーツ（Clifford Geertz）はいう，「私は二つの考え方を提示したい。まず第一は，文化は，大体今日までそうであったように，

具体的な行動様式の複合体――慣習，慣例，伝統，習慣――としてではなく，行動を支配する制御装置――計画，処方，規則，指示（コンピューター技師が「プログラム」とよぶもの）――として見られるべきであるという考え方である。第二の考え方は，人間は人間の行動を秩序づける，遺伝を越え，身体の外にある制御装置，すなわち文化的プログラムに何より依存する動物であるというものである」[60]

筆者はこの考え方に強く魅かれる。この考えと今まで展開してきた議論とは，相互補完的関係にある。

そこで，筆者の考える文化の定義は，

「文化とは，特定の時空環境内において，連鎖的情報選択／淘汰を含むコミュニケーション行為の累積的・複合的過程によりつくりだされた，最も広い意味での人間の生き方に関する制御プログラムの総体である。」

となる。そして，コミュニケーションの定義は，

「コミュニケーションとは獲得した情報の機能化のプロセスである。」
(“Communication is the process of functioning the acquired information.”)

となる。ひっきょう，文化の特性は情報の偏りから生じる。そしてその偏りをつくりだすのが，コミュニケーションという vehicle なのである。

60) Geertz, Clifford (1973): *The Interpretation of Cultures,* New York: Basic Books, p. 44
吉田禎吾他・訳（1987）『文化の解釈学〔Ⅰ〕』（岩波書店），p. 77